

新潮文庫

アンの愛情

モンゴメリ
村岡花子 譯



新潮社

アンの愛情

定価110円



新潮文庫

昭和三十一年五月三十日 發行
昭和三十三年三月二十日 四刷

訳者 村岡花子

発行者 東京都新宿区矢来町七一
佐藤亮一

發行所 株式会社 東京都新宿区矢来町七一
新潮社

電話東京(34)代表(七一)(九)
六一〇一(五)
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・扶桑印刷株式会社 製本・新宿 加藤製本所

© Printed in Japan

新 潮 文 庫

ア ン の 愛 情

モ ン ゴ メ リ
村 岡 花 子 訳



新 潮 社 版

965

目次

第一章	変化のきさし	九
第二章	秋の花飾り	二
第三章	出 発	三
第四章	四月の淑女	四
第五章	故郷からの便り	六
第六章	公 園 で	七
第七章	帰 省	八
第八章	初めての結婚申込み	三
第九章	不愉快な求婚者と嬉しい友人	九
第十章	パティの家	一〇

第十一章	人生の移り変り……………	一三
第十二章	アビリルのあがない……………	一三五
第十三章	不信実な者たちの道……………	一四六
第十四章	去りゆく友……………	一六三
第十五章	夢のゆくえ……………	一七四
第十六章	「パティの家」の住人……………	一八一
第十七章	デイビーの手紙……………	一九六
第十八章	ミス・ジョセフィンの遺言……………	二〇一
第十九章	幕　　あ　　い……………	二〇九
第二十章	ギルバート口をひらく……………	二一五
第二十一章	きのうのぼら……………	二三三
第二十二章	アン、グリーン・ゲイブルスへ帰る……………	二三九

第二十三章	山彦莊の人びと……………	二三五
第二十四章	ジョナス登場……………	二四一
第二十五章	美しの王子登場……………	二四八
第二十六章	クリスチン登場……………	二五七
第二十七章	打明け話……………	二六二
第二十八章	六月のたそがれ……………	二七〇
第二十九章	ダイアナの結婚式……………	二七七
第三十章	スキナー夫人のロマンス……………	二八二
第三十一章	アンからフィリパへ……………	二八七
第三十二章	ダグラス夫人のお茶……………	二九一
第三十三章	通いつづけた二十年……………	二九八
第三十四章	ジョン・ダグラス遂に語る……………	三〇三

第三十五章	レドモンドの最後の年……………	三二
第三十六章	ガードナー夫人とその娘たち……………	三二
第三十七章	学士たち……………	三九
第三十八章	偽装した愛情……………	三七
第三十九章	結婚式さまさま……………	四六
第四十章	『黙示録』……………	三七
第四十一章	真実の愛……………	三六三

あとがき……………	三七
-----------	----

アンの愛情

―第三赤毛のアン―

「アンについて、もっと多くを知りたい」という

全世界の若い女性たちに、この書をささげる」

L・M・モンゴメリ

第一章 変化のきざし

「刈りいれは終り、夏は去った」

と、アンは刈り取られた畑を夢みるように眺めながら口ずさんだ。グリーン・ゲイブルスの果樹園でりんご摘みをしていたアンとダイアナ・バーリーは、今、目溜りではっと息をついているところだった。あざみの綿毛の空軍が風の翼にのつて、ふわふわとこのひとすみへ押寄せて来たが、「お化けの森」のしだの上を吹くかぐわしい風にはまだ、快い夏の名残りがただよっていた。

だが、ふたりをめぐる風景はすべて秋をささやいていた。遙かむこうの海はうつろな唸りをあげ、はだかになった野原は乾涸らびて、僅かにきりんそうを飾りつけているだけだった。グリーン・ゲイブルスの家の下手にあたる谷あいしやうの小川には薄紫のしおんの花がこぼれるばかりに咲いており、「輝く湖水」の水は青——青——青一色であった。変りやすい春の青ではなく、夏のうすい空色でもなく、きょうの湖はあたかもあらゆる気分や感情の乱れは既に収まり、今はもはやむなしい夢にかきみだされることのないおちつきに達したかのように、澄み切った、不変の、沈静な碧い色であった。

「素敵な夏だったわ」ダイアナは左手にはめたあたらしい指環をひねりながらほほえんだ。「そ

して、ラベンダーさんの結婚式が、いわばそのクライマックスだったみたいね。今頃、アービン
グさん御夫婦は太平洋岸に行ってることでしょよ」

「あたしにはあの人たちが行ってしまってから、世界をひと回りするくらいの長い月日がたった
ような気がするわ」と、アンは溜息をついた。「あのふたりが結婚してから、まだ一週間しかたっ
ていないなんて信じられないわ。いっさいが変ってしまったんですもの。ラベンダーさんやアラ
ン先生御夫婦はいなくなるし——牧師館には鑑戸が全部おりて、なんて淋しい様子でしょう！
ゆうべ、あのそばをとったけれど、まるで中の人みんな死んでいるような気がしたわ」

「アラン先生のような素晴らしい牧師さんは二度と望めないわね」ダイアナは憂鬱そうに断言し
た。「この冬はいろんな代理牧師がやって来るでしょうし、全然お説教なんか聞けない日曜日が
半分ぐらいはあるでしょうよ。しかも、あんたとギルバートは行ってしまうし——おそろしくつ
まらなくなるわ」

「フレッドがいるじゃないの」

と、アンは狡ろそうにあてこすった。

「リンドの小母さんはいつ引越して来なさるの？」

ダイアナはてんでアンの言葉が聞えないような調子で訊ねた。

「明日よ。小母さんが来なさるのはうれしいわ——でも、これもまた変化の一つなのよ。きのう、
マリラとふたりで客用寝室の道具をいっさいがっさい運び出してしまったのだけど、あたし、そ
れがとてもいやだったの。もちろん、ばかげた感傷だとは思うけどね——でも、まるで神聖なも

のを汚しているような気持だったわ。あの古い客用寢室はあたしにとって、いつも一種の神殿のようなものだったのよ。子供の頃には世界じゅうでいちばん素晴らしい部屋だと思っていたものだわ。あんた憶えているでしょう、客用寢室のベッドで眠ってみたいというのは、あたしの焼きつくような願いだったのよ——でも、グリーン・ゲイブルスの客用寢室じゃないのよ。おお、そんなでもないことだわ！ あそこじゃあんまりもったいなくて——おそれおのいて、一睡だてできやなかったでしょうよ。マリラから用事を言いつかって、はいつて行く時でも一度だってあの部屋の中をずかずか歩いたことなんかないわ——ほんとうよ、まるで教会にいるみたいに、息を殺して抜き足差し足で歩いて、外へ出た時にはほっとしたもののよ。あそここの鏡の両側にジョージ・ホワイトフィールド(英国の宗教家 七一四—一七七〇)とウェリントン公(英国の政治家 七六九—一八五二)の額がかかっている、あたしをじっと見ていたわ。あの鏡が家じゅうでたった一つ、あたしの顔を少しも企めてみせない鏡だもんで、思いきってちょっとひと覗きしようものなら、それはそれは怖い顔をしてあたしをにらみつけたものよ。あの部屋をよくもマリラがお掃除できるものだ、いつも感心していたわ。それが今ではお掃除どころか、むき出しにされてしまったんですもの。ホワイトフィールドもウェリントン公爵も二階の広間へ追放処分よ。『かくて移り行くこの世の栄華』こう言ってるのは笑ったが、その笑いにはかすかな哀愁がこもっていた。曾ての日に愛着をもった古い神殿は、もはや成長してそんなものに興味を感じない年頃になっても、倒されるのを見るのは愉快ではなかった。

「あんたが行ってしまったら、あたし、淋しくてたまらないわ」ダイアナはこれで百回目の嘆息

をもらした。「しかも来週行ってしまうと思うと！」

「でも、あたしたち、まだこうして一緒にいるんだから、来週のことを考えて今週の楽しさを台無しにしてはいけないわ」と、アンは元気よく言った。「あたしだって行くと思うといやだわ——グリーン・ゲイブルスの家とあたしは大の仲よしなんですもの。淋しいと言って嘆くのは、あたしのほうよ。あんたは何人もの昔からの友達とここにいられるんですもの——それにフレッドがいるのよ！　ところが、あたしは誰ひとり知る者ともなき、あかの他人の中へひとりぼっちではいっていくんですもの！」

「ギルバートがいるじゃありませんか——それ、に、チャーリー・スローンだってね」

とダイアナがアンの口振りとあてこすりを真似た。

「たしかに、チャーリー・スローンには大いに慰められるでしょうよ」

と、アンは皮肉な言いかたをし、ふたりの乙女は途方もなく爆笑した。アンがチャーリー・スローンのことをどう思っているか、ダイアナにははっきり分っていたが、いろいろ打明け話を交わすにもかかわらず、アンのギルバート・ブライスに対する気持は見当がつかなかった。それもその筈、アンにも自分の気持が分らなかったのである。

「男の子たちはキングスポートの向うはすれに下宿するようよ、あたしの知るところではね」と、アンは言葉をつづけた。「あたし、レドモンドへ行くのはうれしいし暫くたてばきっと好きになると思うのよ。でも、最初の二、三週間はそうはいかないことが分っているの。クイーン学院の時のように、週末に家へ帰るのを楽しみに待つということさえないんですもの。クリスマスなん

か千年も先のことに思えるわ」

「なにかも変ってしまふのね——変ろうとしてるんだわ」ダイアナは悲しげに言った。

「あたし、ものがごとが二度と元の通りにはならないという気がするのよ、アン」

「あたしたち、わかれ道に来たのじゃないかと思うわ」アンは考え込みながら言った。「どうしても来なければならなかったのよ、ここへ。ねえ、ダイアナ、大人になるって、あたしたちが子供の頃、いつも想像していたほどに、ほんとに素敵なことだと思って！」

「分らないわ——素敵なことも少しはあるにはあるわね」ここでまたダイアナは例のかすかな笑いをうかべて指環を撫でたが、その微笑を見るたびにアンは急に自分が取残されたような、未経験者という気持ちにさせられるのだった。

「でも、まごつくことも、とてもたくさんあるわ。時には大人だということが怖くなることもあるの——そんな時にはなんとしてでも、もう一度、小さな子供に戻りたいと思うわ」

「そのうちにあたしたち、大人だということに慣れてしまふわよ」と、アンが快活に言った。「結局、そう大して意外なことばかりでもないでしょうよ——もっとも、意外な事件がなかったら人生におもむきはないだろうという気はするけれどね。あたしたち、十八よ、ダイアナ。あと二年ではたちですもの。十歳の時分に、はたちといったらカクシヤクたるおとしよりだと思ったものね。もうじきにあんたは物腰のおちついた中年の主婦になるし、あたしは感じのいい独身者のアン小母さんになって、休暇にはあんたを訪ねて行くわよ。いつもあたしのために少しばかり場所をあけていてね、ダイちゃん？ もちろん、客用寢室じゃなくてよ——独身者に客用寢室など望

むべくもないし、あたしは遠慮ぶかく、いともつつましやかにふるまうわよ。と関が、客間から離れた、居心地のよい小部屋で充分満足することよ」

「なんて馬鹿げたことを言うの、アン」ダイアナは笑った。「あんたはきつとだれか素晴しく美しい男子で、お金持の人と結婚するわよ——そうすれば、アヴォンリーじゅうのどんな客用寢室だって、その豪華さにおいて半分もあんたにふさわしいものとはなくなつてよ——そうして、あんたは得意の鼻をうごめかして、若き頃の友だちなどみんな軽蔑しちゃうわよ」

「それは残念だわ。あたしの鼻はまったく素敵だけれど、でも、うごめかしたりしたらぶちこわしだわ」と、アンはその形のよい鼻を撫でた。「ぶちこわしてもあとが困らないほど、美しいところなんてたくさんは持ち合せていないから、たとえ、食人種の島の王様と結婚しても、得意の鼻をうごめかしたりしないって固く約束しておくわ、ダイアナ」

再び陽気な笑い声を立てて少女たちは別れ、ダイアナは「オーチャード・スロープ」(果樹園の丘)と呼ばれた彼女の家へ戻り、アンは郵便局へと歩いて行つた。局には一通の手紙がアンを待ちうけていた。「輝く湖水」にかけわたした橋の上でギルバート・ブライスが追いついた時、アンは手紙のことで興奮しきつていた。

「プリシラ・グラントもレドモンドへ入学するんですって」アンは叫んだ。「素晴らしいでしょう？プリシラもくればいいのにと思つただけど、あの人、お父さんが承知しないと思つていたのよ。ところが、承知したので、あたしたち、一緒に下宿することになったの。もう、旗を押したてた軍勢だつて——レドモンドじゅうの全教授が東になつて残忍な方陣を築いたつて——プリシラの

ような相棒がそばにひかえているなら、敢然と立ち向える気がするわ」

「僕たちみんなキングスポートが好きになると思うな。気持のいい古い町で、世界一すばらしい自然公園があるそうですよ。その公園の景色が実に壮大だそうだ」

「ここよりも美しいかしら——美しい筈があるかしらと思うわ」

と、アンはいつくしむような、うっとりとした目つきで周囲を見廻しながら呟いたが、その目は、たとえ異郷の星の下にいかにもすぐれた国が存在しようとも、常に「故郷」を世界じゅうでもっとも美しい場所と、心得なければ気のすまぬ人々の目であった。

ふたりは古池の橋にもたれ、薄暮の魅力に酔っていたが、その場所はちょうどカメロット城へ漂いくだるエレーン姫を気取ったアンが、沈み行く平底舟から這い上ったところであった。（「毛の参照」）輝かしい、緑がかった夕焼がまだ西の空を染めていたが、月が上りはじめ、その光をうけて水は大きな銀の夢のようによこたわっていた。思い出は若いふたりの上に甘い、得も言われぬ魔力を織りなした。

「ずいぶん、おとなしいね、アン」

とうとうギルバートが口を切った。

「あたし、沈黙を破ったら、この素晴らしい美しさが消えてなくなりはしないかと思って、もの言いうことも、身動きすることもできないのよ」

と、アンは囁いた。

ギルバートは不意に、橋の欄干におかれたほっそりした白い手に自分の手をかけた。淡褐色の